

前期

文系

平成二十九年入学試験学力検査問題

国語 (人文・社会系、法学系、経営学系A区分 一二〇分)

答案用紙 三枚

注意

- 一、監督員の合図があるまで、問題の内容を見てはいけません。
- 二、受験番号及び氏名は、答案用紙の所定欄に必ず記入してください。

(例)  
受験番号  
1234567X  
の場合

↓

		1	2	3
4	5	6	7	X

- 三、解答には黒鉛筆またはシャープペンシルを使用し、必ず配付された答案用紙に記入してください。答案用紙には、解答に関係のないことを記入してはいけません。
- 四、試験中に不鮮明な印刷等に気付いた時は、手をあげて監督員に申し出てください。
- 五、答案用紙を切り取ったり、持ち帰ったりしてはいけません。
- 六、問題冊子の余白は利用可能ですが、どのページも切り離してはいけません。
- 七、問題冊子は、持ち帰ってください。また、試験終了時刻まで退室できません。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中比、武州に、境間近き程に、互ひに睦ぶ俗ありけり。一人は家貧しく、一人は豊かなりけり。さるままには、常に借物  
なんどしけり。

さて、共に死にて、かの一人の子の夢に見えけるは、亡父来たりて、よに物歎かしき気色にて言ひけるは、「某殿の物を  
いくいくら借りて、返さざりし程に、あの世にて責めらるるが堪へがたきに、かの子息の許へ返すべし」と告ぐ。

夢さめて、親の時よりの後見に、事の子細を尋ねければ、「さる事侍りき。御夢に違はず」と言ふ。さて、「不思議の事な  
り」とて、急ぎ員数の如く沙汰して、かの子息の許へ、「かかる子細侍れば、かの借物、沙汰し参らするよし、委しく申し送  
りけり。」

かの子息、返事に申しけるは、「この物、いかでか我が身に給ふべき。あの世にて、某が父、責め参らせむ上に、また重ね  
て給ふべからず」とて返しけり。押し返し送りて言はく、「この世にて沙汰し参らせざらむにつきてこそ、あの世にて責められ  
参らせ候へ。親の歎きを休め、夢の告げを違へじと思ひ侍り。まげて取らせ給へ」とて遣りけり。また言ひけるは、「親のこと  
を重く思ひ、いたはしく存ずることは、誰も劣り参らすべからず。されば、あの世にて、親にこそ取らせたく思ひ候へ。ここ  
にて我が身に給はるべき様候はず」とて返しけり。

度々問答往復して、事ゆかざりければ、鎌倉に上りて対決しけり。奉行人より始めて、上にも下にも、聞き及ぶ類、「かか  
る珍しくあはれなる沙汰、未だ聞かず。至孝の志、世間の理も、深くわきまへ存するにこそ」と、誉めののしりけり。心あ  
る人は、涙を流してぞ感じける。

さて、「件の物を以て、両人の亡父の菩提を弔ふべし」と下知せられければ、国に下りて、二人、亡父の為に仏事を営みけ  
り。まことにありがたかりける賢人なり。

『沙石集』より

※注

中比Ⅱ昔と今との間で中ほどの時分。 武州Ⅱ武蔵国。現在の東京都・埼玉県・神奈川県東部。 俗Ⅱ世間一般の人。 出家していない人。 後見Ⅱ陰にいて人を助け世話する人。 財産管理を補佐する人。 員数Ⅱ人や物の数。 対決Ⅱ鎌倉・室町時代の訴訟手続きのひとつ。 両者が裁判所に出頭し交互に口頭弁論を行うこと。

問一 波線部(1)～(4)を現代語に訳しなさい。

問二 傍線部①～⑤の助動詞の意味を次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- A 打消意志
- B 命令
- C 伝聞推定
- D 受身
- E 尊敬
- F 断定
- G 過去

問三 二重傍線部(a)～(e)の主語にあたる人物を次の中から一つ選んで記号で答えなさい。答えは同じ記号を何度用いてもよい。

ア かの一人の子

イ かの子息

ウ 亡父

エ 某が父

オ 親の時よりの後見

カ 奉行人

キ 心ある人

問四 傍線部Ⅰについて、どのような内容か説明しなさい。

問五 傍線部Ⅱについて、どのような状況か説明しなさい。

問六 傍線部Ⅲについて、「賢人」がどの人々であるかを明確にしたうえで、この説話の著者はなぜそのように考えたのか、その理由を問題文の内容に即して一〇〇字以内で答えなさい(句読点も字数に含める)。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「時は金なり」という格言がわれわれに教えること、それは「時間は貴重だ、① してはならない、まるでお金と同じ

だ」ということだと言われている。しかしこの格言からはもう一つ別の意味を読み取るべきである。それは時もお金もそれ自体に価値があるのではなく、それを価値づけるものが別であり、それを忘れて時間やお金ばかりをありがたがるのはオロカしいことだということである。少し考えてみれば、<sup>A</sup> お金そのものに価値があるわけではないことはすぐわかる。お金に真の価値を与えているのは財やサービスである。お金は真に価値のある財やサービスとの交換が保証されているときにのみ価値を有するのであり、その交換価値が保証されなければお金はただの紙切れであり、鼻も拭けない。

それでは時間に価値を与えているものとは何であろうか。「今日は一日充実していたな」と満足できるとき、その満足感を与えているものは、<sup>B</sup> 今日一日という時間そのものではない。そうではなくて、今日という日に、いい仕事ができたとか、家族の団欒を楽しんだとか、余暇を満喫できたとか、そういう出来事こそがそうした満足感を起こさせている。もし時間それ自体が充実感を与えているのなら、一日二四時間、一四四〇分、八万六四〇〇秒、ずっと充実感の中にいることになるが、そんなことをまじめに言う人はいないだろう。

逆に「今日はさんざんだった」と言われるときも、その日一日何をやってもうまくいかなかったとか、通勤電車が事故で大幅に遅延したとか、財布を落としたとか、恋人にふられたとか、そうした失敗した行為や、不運あるいは不幸な出来事とのソウゲウが「さんざんだった」という価値づけを「今日」に与えている。あまりに大きな失敗やたくさんの不運があると、一日中不幸や不運の連続のように思えてしまうが、別に一日中不幸な出来事が連続していたわけではない。一日のほとんどにおいて、身体の駆使や身の回りの出来事の処し方は<sup>C</sup> トドコオリなく遂行されている（異常なく呼吸ができていた、同僚が仕事を手伝ってくれた等々）。それゆえ、時間にプラスの意義を与えるのも、マイナスの意義を与えるのも、われわれが体験する出来事の方である。これこそが時間に価値を与えている内実なのである。

だがそうは言つても、何かいいことがあるとその日一日ずつと気分が上々であったり、逆に悲しいことがあれば、悲惨な心情がその日一日ずつと続いたりということもあるだろう。そうした場合、「今日という日がうきうきする」とか、「今日という日が悲惨だ」ということにはならないか。しかしそれでも、「今日という日そのものがうきうきする」のでもなければ、「今日という日そのものが悲惨」なわけでもない。「今日という日に、あなたの気分がうきうきしていた」のであり、「今日という日に、あなたの気分が悲惨だった」のである。うきうきした気分であったことも、悲惨な心情を憂えたことも、やはりあなたが体験した出来事の一つなのである。だから、たとえあなたにとつて「心地よい一日」でも、他の人にとつては「不快な一日」かもしれないし、あなたにとつて「悲しい今日」でも、他の人には「生涯最高の日」かもしれない。今日という時間が、あなたとその他の人とに共通の一日であるなら、その日が「不快」だとか「悲しい」などと自分の印象だけを押しつけることはできないはずだ。「今日」という日は、有意義なものでも、悲惨なものでも、無駄に過ぎて行くものでもない。

お金も時間も、それ自身をありがたがつて追い求めても、それに価値を与えている本当のものを見損なっているならば、結局ものごとの本質を見失う。それが「時は金なり」の私の解釈である。お金は使つてこそ価値を発揮する。いかにお金を上手に使つて財やサービスを確保できるかが重要だ(貯蓄やユウシは<sup>(エ)</sup>お金をそのままにしておくことで価値が生ずるように見えるが、それでも利殖による蓄財もいざというときに財やサービスと交換できるものであるからこそ、人はお金そのものを増殖させようとする)。それと同様に、時間もそれを効果的に利用して、価値ある出来事を実現させることが肝心だ。大概の人はそのことをよく心得ていて、お金も時間も「どのよう<sup>(エ)</sup>に使うか」と思案するが、中には考え違いをする人もいて、お金そのものを目的として「金持ち」になることを目指す人もいれば、時間そのものを追究する人もいる。ところが前者は「守銭奴」と蔑まれ、後者は「哲学者」と持ち上げられる。そこに何ほどか、お金と時間に対するわれわれの価値観の相違が反映されている。

お金と時間とが似て非なるのは、その配分のされ方である。お金は誰にでも平等に与えられているわけではなく、その所持額の多寡が貧富の差となつて社会生活上の優劣を歴然と示す。だからお金は財やサービスと交換されてこそとは承知しながら、いつでも自由に財やサービスと交換できるようにお金そのものを貯めておくことや増やすことが欲求される。それゆえ、

金持ちになどなれないと諦めて<sup>あきら</sup>いる多くの人々は金持ちを羨<sup>うらや</sup>みもするが、悔しき紛れに、所詮<sup>しよせん</sup>金欲は物欲だと断じて「守銭奴」などと輕蔑もするのだ(もつとも貧乏人でも金持ちになるチャンスがあると信じて励んでいる人々ならば金持ちを蔑まないのではなからうか)。

他方で、時間は誰にでも平等に配分されていると考えられている。王侯貴族や金持ちにも庶民大衆にも一日は等しく二四時間である。もちろん、余暇を満喫できる王侯貴族や金持ちと貧乏暇なしと言われる庶民とでは、その使い方に歴然とした違いはあるものの、絶対量としては② 時間が与えられていることに皆が同意する。「自分が汗水流して働いている同じ時間、あいつら優雅にのんびり暮らしている」、そう思えるから腹が立つ(もつとも王侯貴族や金持ちにだって時間の使い方苦勞はあるが、貧乏人は与<sup>あづか</sup>り知らない)。だからさすがに、「時間自体」を貯めこもうとする人はいないが、時間に本当の価値を与えているものを見損なつて「時間自体」を探究している「哲学者」は、③ している点では「守銭奴」と大差がない。ところが、時間とそれに価値を与えている出来事とは別であると一般には考えられているから、そうした日常生活の出来事を捨象した「時間自体」を探究することは世俗のこと(オ)がらからユウリしており、それゆえ「時間自体」を考察することは高尚な学問の領域だと、世間の人はかえつて感心し、それをする当の本人たちもそうした自負を持つてしまう。

(渡辺由文『時間と出来事』より)

問一 傍線部(ア)く(オ)のカタカナの部分に漢字で記しなさい。

問二

①

く

③

には、それぞれどんなことばが入るか。最も適当なものを次の中からそれぞれ一つ選んで、記

号で答えなさい。

イ 同じ

ロ 勘違い

ハ 浪費

ニ 異なる

ホ 節約

ヘ 理解

問三 傍線部A「お金そのものに価値があるわけではない」とはどういうことか。本文に即して説明しなさい。

問四 傍線部B「今日一日という時間そのもの」とは何か。本文に即して説明しなさい。

問五 傍線部C「それに価値を与えている本当のもの」とは何か。本文に即して説明しなさい。

問六 傍線部D「前者は「守銭奴」と蔑まれ、後者は「哲学者」と持ち上げられる」とあるが、「守銭奴」と「哲学者」はなぜ異なる評価をされるのか。本文に即して一〇〇字以内で説明しなさい(句読点等は字数に含める)。



次の文章を読んで、考えるところを四〇〇字以内で述べなさい(縦書きにしなさい)。

子どもは叱るよりも、ほめることが大事だ。これは多くの人が知っていることだが、ほめれば何でもよいというわけではない。何に対してほめるのが大事なのだ。

どのようなほめ方をしたら子どもの算数への取り組み方が向上するかを調べた研究がある。子どもはコンピュータゲーム形式で算数の問題に取り組んだ。子どもを二つのグループに分け、一方のグループの子どもは正解をするとほめられ、別のグループでは学ぶ態度をほめられた。態度をほめられたグループの子どもは、正解をほめられた子どもよりも、算数の理解の向上が著しかった。しかし、もつと重要なことに、算数に対する態度が変わり、正解に対してほめられた子どもたちよりも、難しい問題に取り組む時間が長くなったのである。

正解に対してお金やモノで報酬を与えつづけると、効果がないばかりか逆効果である、というショッキングな結果を報告した研究もある。ある研究では算数と関連した「ゲーム」を小学四年生と五年生にさせた。このとき、ゲームをした半数の子どもには報酬を与え、もう半数の子どもには報酬を与えなかった。さて、どちらの子どもの方がゲームを楽しんだのだろうか。

報酬を与えられた子どもは当初は嬉々としてゲームに勤しんだ。しかし、報酬がなくなるとゲームに対する興味は急激に落ち、もともとまったく報酬が与えられなかった子どもたちよりもそのゲームをしなくなったのである。

結果に対する物質的な報酬は創造的な思考にも悪影響を及ぼすことが別の研究で示されている。この研究では小学四年生、五年生に仮説を生成して問題解決をするような課題をさせた。「よくできた人にはおもちゃをあげる」と報酬を約束された子どもは、約束をされなかった子どもに比べ、系統だった仮説をつくることができなかった。さらに、一週間後にこれに関連した別の問題をさせると、報酬を約束された子どもは約束されない子どもに比べ成績が悪かったのである。

報酬のために何かをさせると、子どもは自発的な興味を失い、報酬を得るためにその課題をするようになる。すると自分なりの工夫をしなくなり、報酬がもらえるように、手っ取り早い方法でいい加減に結果を出そうとしてしまうのだ。

(今井むつみ『学びとは何か―探究人になるために』より)

